

# 2017年スキーオリエンテーリング 世界選手権報告書

---

2017/03/06~3/12

Krasnoyarsk、 Russian Federation



スポーツ振興基金

独立行政法人日本スポーツ振興センター

# 目次

ごあいさつ	2
1 大会に向けての準備	
岸祥太郎（北海道大学）	3
石原拓巳（岩手大学）	5
石原湧樹（東京大学）	6
酒井佳子～オフィシャルの役割について～	7
2 競技報告	
スプリントリレー	9
スプリント	9
ミドル	10
ロング	11
リレー	12
3 ロシアの旅について	13
4 日本チームを支えてくださったみなさまへ	15
5 競技結果(抜粋)	16
6 地図・大会風景	19

## ごあいさつ

この度はロシア、クラスノヤルスクで開催されたスキーオリエンテーリング世界選手権大会への参加にあたり、多大なるご支援・ご声援を頂戴いたしまして、誠にありがとうございます。

2019年のユニバシールド冬季競技大会を見越したプレ大会として開催された本大会は、IOF（国際オリエンテーリング連盟）のみならず、ロシアが国家をあげて力を入れていれており、世界中から21カ国、94名の選手が参加した大会となりました。日本からは、男子3名、女子1名と少数の参加ではありましたが、それぞれに挑戦をし、成果を上げることが出来ました。また、その中でも男子選手3名は、全員が現役大学生であり、未来に向けて新たな若いチームが立ち上がった感触を得ています。現在では30名近い学生の強化指定選手もあり、選手層が一気に拡大してきている時期でもあります。スキーオリエンテーリングという競技の発展には、こうした若い選手の継続的な挑戦を欠かすことは出来ませんが、今まさに、そうした発展の時期を迎えることが出来、また、皆さまの温かい声援を聞くことが出来、大変うれしく思っております。

今大会以降、2018年に第2回スキーオリエンテーリング学生選手権大会がエストニアで、2019年にユニバシールドが再度クラスノヤルスクで開催されることが決定しています。スキーオリエンテーリングをオリンピック種目とする活動は継続されており、まさにあと一歩のところまで来ています。1994年以降、既に20年以上もオリンピック種目入りを目指してきており、遂にこの継続的なチャレンジが報われる日が近づいているものと感じています。日本のみならず、世界のスキーオリエンテーリングを盛り上げるために、皆様のより一層のご協力・ご支援・ご声援を頂戴できますと甚幸です。

最後になりましたが、今回の世界選手権への選手派遣にあたり、様々な形で多大なるご支援を頂戴いたしました。改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

公益社団法人 日本オリエンテーリング協会 スキーオリエンテーリング委員会  
委員長 柴田 達真

# 1 大会に向けての準備

## 岸祥太郎（北海道大学）

- 事前の準備

夏場のトレーニングは、平日はランニングやローラースキーを行い、休日は北大 OLC のフット O の練習会があれば参加した。冬場は、平日はマップホルダーを付けてポールランニングや地図の記憶練習（地図の記憶と運動を交互にやるもの）を行った。休日はスキーをしに行き、一日は心拍数を上げた練習（1km 走とスプリントを意識した 3km 走）を合計 30-40km 程度行い、もう一日はロングを意識して 50km 程度滑った。スキーの練習では、常にではないがマップホルダーを付けた。また、ロシア出発 2 週間前の全日本大会で下りでのカーブが全然出来てないと感じていたので、1 週間前は下りからの急ターンを何度も練習した。

- レース前の準備

レースは全て午後からなので、午前中は宿舎そばのトレーニングコースで 1 時間くらい滑っていた。ライン O などをした後、最後の 10 分くらいは心拍数を上げて滑った。トレーニング以外の時間は前日までの地図を読んでネットワークを暗記しようと試みたり反省点を確認した。

食事は、朝は 7:30、昼は 12:00 に食べた。普段、食事後すぐに運動をしても体が重いと感じたことが無いので、量は特に気にせず食べた。また、ミドルとロングの前は脱水対策のため、朝からこまめに水を飲み、合計で 3L くらい飲んだ。

昼食からレースの間にワクシングをした。そして、スタート 30 分くらい前からウォームアップをした。

- 以上を振り返って

マップホルダーを付けたトレーニングではこまめに地図を読むことを意識していた。そのおかげかどうかは定かではないが、レース中も頻りにマップコンタクトが取れていたと思う。ただ、世界選手権のコースは練習で使ったどの地図よりも難しく、現在地確認に時間がかかったりルートチョイスを誤ったりする場面が少なくなかった。また、きれいな道や机上での地図読みと滑りづらいトラックでは状況が違っているので、スキーだけに気を取られて地図が読めない場面も多々あった。

スキー技術の未熟さは地図読みだけでなく、もちろんタイムにも直接影響した。一週間前のターン練習で結構上手くなったと思うが（モデルイベントでは一度しか転倒しなかった！去年の自分だったらもっと多いはず）、競技エリアはかなり急であったため、何度も転倒した。転倒によるミスタイムはかなりのものになっていると思われる。

ネットワークの暗記は正直役立った気はしない。暗記すれば一瞬でルートチョイス出来るかもと思ったが、そんなことは無かった。もっと良い時間の使い道があったかも知れない。ただ、地図を読みながら反省点を繰り返し確認したのは良かった。レース中に時々思い出し、活かすことが出来たと思う。

ミドル、ロング、リレーと 3 日連続でレースがあるので、体力面が不安だったが、最終日のリレーでは思ったより疲れが無かった。ロングでミスを連発して LSD みたいになっていたことも一因ではあるが、トレーニングで毎週 50km の距離練習をしていたおかげだと思われる。また、脱水対策のおかげか、レース中に喉の渴きを感じることは一度も無かった。前述のように、ロングで LSD みたいになっていたことも一因だが。

最後に自分にとってベストだったレグについて述べる。ロングの 2 枚目の 5→6→7→8→9→10 が結構上手くいったと思う。この区間はルートがすぐ決まり、地図読みもしっかり出来ていて流れがスムーズだった。ミドルとロング 1 枚目で似たようなまわしがあったので、慣れていたのでだろう。

\*ロングの地図は 19 ページに掲載しています。

## 石原拓巳（岩手大学）

- スキーについて

8月末までは公務員試験や大学院試験があったのでトレーニング量は確保できなかったが、勉強の合間に体力を落とさないことを目標に体幹トレ（腹筋、背筋、腕立て）と、時間があるときは安比高原レインボーラインにローラースキーをしに行った。しかしそれでも四肢はやせ細った。

9月以降は他大学スキー部の合同合宿に混ぜてもらうなどして練習量を確保した。11月以降は卒論が忙しくなり、継続した練習はできなかった。年末年始や、留寿都で2回ほど開いていただいた練習会が主な雪上練習の機会だった。2月下旬以降は卒論も終わり、ほぼ毎日雪上に乗れたので、落ちた走力を回復させるべく、距離多く滑ることを意識し、1日で多い時で40~45km程滑った。スピードについては、インカレスキーのレースや、出発直前に自分でレペティションを行った。

本番は、スケートでは体がよく動いたが、急斜面でのダブルポールに限界を感じ、板を脱いで走る場面が時々あった。また、下りでの細かいモービルトラック等では、スキー操作に一杯一杯で地図を見ることができない場面が時々あった。

- ナビゲーションについて

秋以降フットの大会に何度か参加した。素早く地図を読んで判断することを目指し、なるべく止まらずに地図を読むことを心掛けた。比較的スキーOに近い性質だと感じたスプリントでは、ポスト周りの動き等もよく反省した。1月、2月のルスツ練習会では様々なナビゲーションの練習を教えて頂いた。その際私は、マップコンタクトを多くし、地図の先読みを心がけて練習した。自宅では、ルスツの地図や、練習会で頂いた地図を、ナビゲーションの基本手順を忠実に守りながら眺めた。

本番のコースは難しかったが、ピステ道が多く、下り斜面を除いてはマップコンタクトがとりやすかった。スプリントやリレーでは集中力を保つことができ、ナビゲーションの基本手順を守りながら地図を見ることができたが、地図上での現在地を把握するのに時間がかかったり、ピステ道で油断する等して大きなタイムロスを生むミスをしてしまった。また、道のみを見ているとルート選択を失敗することもあると実感した。

- 自分にとってベストだったレッグ

「これだ！」というものはないが、リレー1走の1から4までは高いレベルの集中力を保つことができた。ミドル、ロングと失格が続き最後まではまともなレースをしようと考えたこと、チームメイトの走りを無駄にしないよう特に大きな緊張感を持ったことが主な要因と考えられる。また、速い集団に引っ張られていたのもあり、地図の先々を読むよう心がけた。さすがに5種目目となると下り斜面の細かいネットワークにおけるスキー操作に慣れてきたが、ナロートラックの幅の感覚を早い段階でつかむことは大切だと感じた。

\*リレーの地図は21ページに掲載しています。

## 石原湧樹（東京大学）

- ・ 今回の大会に参加するにあたって、事前に主に次のような解決されるべき課題を認識していた。

### ① 狭い登りの多いコース

クラスノヤルスクは登りの多いトレインであると聞いていた。特にモービル道をダブルポールで登るようなことはクロカンではあまりないので、普段のクロカンの練習時にダブルポールのみでコースを廻るトレーニングを取り入れた。その成果か、狭い登りも大きくスピードを落とすことなく滑ることができた。しかしやはりロングなど西北と東北の山に何度も登らされ腹筋と腕の限界を感じた。

### ② ロング

スキー0で長時間のレースを私は経験したことがなかった。レース中にエネルギーを切らさぬよう、堀江さんに教えていただいた方法、つまり補給用の食品を持ち運べるようレーシングスーツにポケットを縫い付ける準備をした。またスキーマラソンなどで実際に試した。今回のロングのレースでは給水が三回、会場内に設けられていたため、全て酒井さんに預けて手渡していただいた。

### ③ 複雑に走る広い圧雪路

公開されていた地図や、見せていただいたかつてのロシアでの世界選手権の地図には、私が日本で経験したことのないような、入り組んだ広い圧雪路があった。そのような地図に慣れるため、堀江さんにお借りしたいくつかの地図を読んだ。しかしレース中には気づかぬうちに思ったより先に進んでいて現在地を見失うことがあった。こまめに地図とコンパスに目を落とすことの重要性を感じた。

- ・ 自分にとってベストだったレッグ

私が大会を通じて最も成功したと思うのは、誘導のある区間などを除けば、ロングの一枚目の後半から二枚目の1ポストまでである。この区間は、ほぼミスなく、また適正なペースを保って高い集中力でまわることができた。特に二枚目の1ポストまでは道の概形を記憶していたことに加え、ワイドトラックで落ち着いて地図を読むことができたので、瞬時に最短ルートを見つけ、全く減速することなくたどり着くことができた。一度でもこのようなレースのイメージをつかめたのは収穫であった。また、その意味では、ミドルの19ポスト以降も他国選手についていくことが出来、良いイメージを持つことが出来た。

\*ミドルの地図は20ページに掲載しています。

## 酒井佳子～オフィシャルの役割について～

成長著しい選手たちと一緒に、ロシア・クラスノヤルスクに行くのはとても楽しそうだと思います、オフィシャルに手を挙げた。幸い、手元には2000年クラスノヤルスク大会の報告書があり、加えて、私自身、選手として2007年モスクワ大会に出場した経験があったので、ロシアでの大会において、オフィシャルとして何をすればよいか想像することができた。

実際のところ、クラスノヤルスクでは、チームに立ち上がる壁を乗り越え、エキサイティングな日々を楽しんでいたのだが、このように毎日を楽しめたのも、オフィシャルの至らぬ点には目をつぶり、物事を前向きに捉える選手たちのおかげだったりもするのである。

2000年大会の報告書のように、将来、この報告書が役立つ日が来ることを祈りつつ、今回、オフィシャルとして行ったことを、できるだけ具体的に書いていきたい。

### ・ 大会前

オフィシャルが行う事務は、12月中旬(大会3か月前)の一次エントリーが最初である。その後、主催者とメールで連絡を取り合いながら、メンバーのビザの申請や、航空券、宿の手配をしたり、IOFへの選手登録(アスリートライセンス)を行ったりした。パソコン音痴を泣かせる事務で、選手全員とJOAの清水さんはかなり助けてもらった。主催者などへの送金手続きは、すべてこの清水さんが引き受けてくれた。

次に行ったのは、IOF競技ルールの通読である。スキーOが森の中での戦いから観客に見せる戦いになっていく中、ルールの変更も頻繁に行われており、世界選手権に行くたびに通読する必要があると感じた。ちなみに、世界選手権は3年後から毎年開催となり、種目の追加もある予定とのこと。

情けないことに、私は世界選手権まで3か月を切っても、選手の人となりや、彼らのレース運びの特徴・癖のようなものを把握していなかった。従って、信原さんや笹田さん(ルスツ)が、ロシアに行く前に2回、選手たちとの合宿の機会を設けてくれたのには、本当に助けられた。合宿では、モバイルトラックを利用したナビゲーションの練習をすることもできた。練習メニュー作りにあたっては、スキーオリエンテーリングトレーニングハンドブック Version1.0 や、幸山さんなど元日本代表選手の助言を参考にした。

チームの備品を考えるのもオフィシャルの仕事といえるが、ワックスに関しては、選手が選んでくれたので助かった。備品は十分に検討したつもりだったが、コンパスは盲点であった(コンパスが油漏れを起こし、使えなくなるトラブルがあった)。次回は必ず持って行きたい。

### ・ 大会中

オフィシャルの主な仕事は、大会主催者側からの情報を自国チームに確実に伝えることだが、今回は公式夕食会への出席や地元高校生らとの交流など、レース以外の仕事が多かった。とは言え、公式夕食会では、過去に選手として活躍し、現在はコーチや大会運営者として活動している人々と接して励みになったし、夕食会で知

り合った人から、後にチームのピンチを救ってもらったりし、なかなか収穫の多い夕食会であった。

今回、私はコーチングゾーンに立ち、選手たちの給水給食の補助を行ったが、ここでも興味深いシーンが見られ、収穫が多かった。強豪国の選手らはどのように給水をしているのか、長時間屋外にいるコーチらはどのように過ごしているのか、発見の連続であった。

・まとめ

今回は、「観客に見せる」大会運営(例えば、観客席向かいの巨大スクリーンに地図と選手のルートがリアルタイムで映し出されていた。)がされていた一方、コース情報が選手側に漏れないよう、競技会場での選手、コーチ、ワックスマンらの動線は、かなり複雑であった。それを経験できただけでも大きな収穫だったが、加えて、上記2のとおり、他国の選手、コーチらの工夫を観察できたり、困った時に助けてくれる顔見知りができたりと収穫は多かった。また、オフィシャルとして不足していた部分も把握できた。本報告書やスキーO 仲間との会話を通じて、これらの収穫や反省点を共有していきたい。

## 2 競技報告

### スプリントリレー

石原拓巳

スプリントリレーは1、3、5走が女子、2、4、6走が男子で、マススタート方式で行われた。日本チームは酒井佳子と石原拓巳で挑んだ。

天気がよく気温が上がったが、雪は激しく緩むことはなかった。板はよく滑った。

1走の酒井さんは、スタート直後のピステ道の複雑な分岐に惑わされ、いくらかタイムロスしたようだった。後続に大きな差をつけトップで帰ってきたのはスウェーデンだった。あまりに速かったためか2走男子は準備ができておらず、チェンジオーバーに手間取っていたがそれでも後続とは余裕があった。私は、チェンジオーバーの際に酒井さんから分岐についての忠告を受け、また初戦だったこともあり慎重に滑った。

3走以降、酒井さんはロスなく滑りきることができたようだった。私は分岐を見過ごす等いくつかミスをしてしまった。ナロートラックのT字路は日本と違って角が直角であり、気づくのが遅くなり見過ごしてしまった。酒井さんもだと思うが、レース中は、他国選手はあまり見えず、一人旅の場面が多かった。

結果はゴールした国の中で最下位だった。初戦なので景気よく行きたいところだったが幸先良いとは言えない結果だった。後でラップを見てみると二人とも他国選手に大きな差をつけられていた。体の調子を合わせて集中していたつもりだったが、甘さがあったようだ。振り返ると、慎重になりすぎていて、チェンジオーバー前後のピステ道などもっとガツガツ行けたと思う。一瞬たりとも取りこぼさないような気迫、戦う気持ちが足りなかったのではないかと私は反省した。

### スプリント

石原湧樹

スプリントは私の初めてのレースだった。前日のミックススプリントで酒井さんが翻弄された複雑な道のある場所がまた使われるのではないかと、返却された地図をできるだけ頭に入れて臨んだがほとんどが前日とは違う場所だった。

当日は天気が非常によく、予報以上に気温が上がりワックスキャビンの温度計では+10度近くあり、もともと硬かった雪はどんどん解けてざくざくになっていた。

私は初めてのレースで緊張していたのかもしれないが、スタートの前後で地図を読んでもあまり頭に入らなかった。その結果1ポストでいきなり迷ってしまった。さらに1、2番ポストのある南向きの斜面は日光が照って最もざくざくになっていて、雪のなくなっているところさえあり、スキーのコントロールが難しかった。道を外れたりスキーのトップが刺さったすると抜けなくなるような状態で、焦って転んで

はまた焦って、を繰り返してしまった。また同じ斜面にある 5 ポストからの脱出の際、道が乱れていて見づらく、現在地を見失ってしまった。以上の二つがこのレースでの大きな失敗だった。しかし北側の林に入ると雪の状態は幾分よくなり、また留寿都や安比でも滑ったようなモービルトラックのネットワークで、落ち着いてまわることが出来た。

その後も特に大きなミスはなくまわれたが、スピードの出やすいトラックだったため地図読みが追い付かず、あまり体が追い込まれず、13 ポストからゴールまでかなりの加速をしてダッシュすることになった。その結果私のラスポゴールはトッププラス 1 秒の 3 番目だったが、課題が地図読みの速さと正確さであると改めて感じたレースだった。

## ミドル

石原拓巳

この日の朝は非常に冷え込み、コースはアイスバーンで危険な状態だったため、主催者から注意喚起がなされた。スタートから 2 まで激斜を登り、その後 6 まで激斜のナロートラックを下ったが、一切掘れないアイスバーンで分岐の度に転倒する羽目になった。ミックスプリントでも述べたように分岐の角は直角で、またトラック以外はヘビーな雪なので日本でのようにステップターンで曲がることは不可能だった。加えて、斜面下部においてカメラマンが多数待ち構えている地点があり、選手が豪快に下っていくシーン或いは派手な転倒シーンには大きな期待がかかっていたようだ。

スタートは個人で 2 分間隔だったので、後続選手に抜かされタイム差を認識したときの心理的ショックは大変大きいものであった。

行程の半分くらいのところでスペクテーターズゾーンが設けられ、そこで給水や用具交換ができるようになっていた。

スペクテーターズゾーン以降は比較的平坦で自動的にスピードが出る状況だったので、スピードを細かく制御しながらより頻繁に地図を見る必要があった。

パンチングシステムは S I だったが、反応しにくいこともあり、反応確認を怠った選手で失格になった選手も少なくないと思われる。私もその一人だった。他の二人は無事完走した。

優勝したブルガリア人のゴールシーンを見たが、速報で優勝と分かった瞬間、彼は彼自身のポールを 2 本まとめてへし折って歓喜していた。全てのコントロールを通過しているかまだチェックしていない時点でこのようなパフォーマンスができる絶対的な自信には驚いた。我々も参考にすべきだと感じた。

## ロング

石原湧樹

それまでのスプリント、ミドルのレースが優勝設定時間を大幅に下回るレースであったためか、前日のテクニカルミーティングでかなりの距離の延長が発表され、距離 31.2km、ポスト数 49、アップ 925m というレースになった。

地図は 4 枚あったが、地図交換はすべて会場のバイアスロンセンターで、4 枚の地図の範囲は全て同じ、コースも全員共通の 4 枚目を除いて大きくは変わらぬまわり方だった。

スタートはマススタートであった。スタート時の地図の種類は 3 枚で、参加者が 40~50 人であったので、一つのコースに 10 数人が一斉にスタートすることになる。これも私は未経験であったため、事前に酒井さんに、地図をしっかりと読んで惑わされぬように、と何度も注意をいただいていた。そのため地図を読もう、読もうと意識していたが、実際にスタートの興奮状態に身を置きマススタートすると地図とコースはあまり頭に入ってこず、結果として間違った集団について行って迷ってしまった。復帰するのにも焦ってしまいかなりの時間を要した。

それをレース中に激烈に反省し、以降は特に常に地図上で現在地を把握するように意識し、一枚目の地図はかなり順調にまわることが出来た。二枚目以降は大まかな廻り方が共通していたので、一枚目の記憶もあり、ワイドトラックを通過して移動するところと細かいネットワークでうまく切り替えることができ、おおかた順調にまわることが出来た。しかし、一度、二枚目の 1 ポストから 2 ポストに向かう際にふと集中力が切れ、現在地ロストをし、復帰するのに 5 分以上を要してしまった。速いトラックで一度でも集中を切らすと大変なことになると身に染みた。3 枚目からは体力、特に腕力をかなり消耗してしまい、かなり遅いスピードであった。沢に降りて急に登るところなど、腕で押すことが出来なくなりスキーを脱ぐことも 2、3 回あった。

補給については、今大会は 3 回の地図交換ごとに会場ですることができ、主催者の用意する水もあり非常にやりやすい会場レイアウトになっていた。一回目の地図交換の際には酒井さんが用意してくださったスポーツドリンクを補給した。二回目は **carbo shotz** を補給した。これは糖分が非常に濃集しているのどが渇くが、酒井さんがいたすぐ後に主催者が用意した給水所があったので助かった。三回目は余裕があればスポーツドリンクのみにするつもりであったが、かなり体力を消耗していたのと 4 枚目もかなり長い、と酒井さんからの勧めで **carbo shotz** も補給した。三回目の地図交換後はフラワーセレモニーが始まるということで会場内のコースを地図交換所から折り返させられてしまった。

またこれは今大会に共通することであるが、雪が非常に硬くとてもスピードがでるトラックだった。またコース外ではすぐスキーが埋まってしまい、道の交わりは曲形ではなくすべて直線的につながっていたので下りのナロートラックでは制動をかけることも困難であった。このような状況ではカーブの際にステップターンで回る技術だけでなく、直角に横滑りをするような技術を身につければかなりスピードを落とさないことが可能になると思った。

ロングのレースは競技時間が3時間であったが、私は3時間を数秒すぎてしまっていた。それでも最後のゴール者であつたらしく大会役員の方たちに拍手で迎えられた。ゴールできたのはよかったが情けない状況で、悔しく感じた。

## リレー

岸祥太郎

気温は今までで一番高く、確か+4度くらいだった。帽子無し、レーシングスーツ1枚でも全く寒くなかった。雪は今まで通り日向はシャベットで日陰はしまっていたが、昨日より滑りが悪いなとウォーミングアップの時に思った。気温が高かったせいだろう。だからといって精神的に何か影響があつたわけではないが。

他国の3走目の人はあまりいなかったと思うが、私は選手が見たかつたので結構早くからスタート待機所に行って、結局出走まで1時間以上いた。ポールランニングで時間をつぶしていたが、正直飽きてしまったので、次3走目をする機会があれば時間の使い方を考えたい。

1走の拓巳がスペクターまでカザフに勝っていたのには驚いた。カザフのコーチは激怒していたが。そして湧樹が準備をしているとき、コンパスが壊れていることが発覚したので、急遽私のコンパスを貸した。彼にとっては慌ただしいスタートになってしまったのではないだろうか。私はフィニッシュした拓巳のコンパスを借りた。

私のレースについてだが、4→5で少しの間現在位置が分からなくなつてしまつたが、それ以外は特にミスはなかつた。しかし、前日のロングでミスを連発して自信を失つていたので、ミスが怖くて全然スピードが出せなかつた。そのためタイムも伸びなかつた。このような精神面の課題を克服したいと思う。また、下から2番目だったので他の選手と競り合う展開も無かつた。

### 3 ロシアの旅について

岸祥太郎

行きは成田からハバロフスクまで 3 時間かかった。ちなみに、ハバロフスクは日本より 1 時間早い。この路線は毎日運航していない。入国審査は 2、3 分で終わる人が多かったが、何分もかかっている人もいた。我々全員が通過するのに 30 分以上はかかったと思うが、乗継便まで 2 時間あったので問題はない。乗り継ぎについてだが、国際線と国内線は別の建物なので、一度外に出て 3 分ほど歩く必要がある。そしてクラスノヤルスクまでは 4 時間と少しかかった。クラスノヤルスクは日本より 2 時間遅いが、札幌との経度差は 45 度なので、現地の 18 時の明るさは普段の 17 時の明るさに感じられた（だからレースの時間が遅かったのだろう）。空港に着くと大会ボランティアの大学生たちが待っていて、我々を宿舎に送ってくれた。所要時間は 30 分ほどである。

帰りはハバロフスクから成田へのちょうど良い便が無かったため、仁川空港経由で成田または新千歳に向かった。ハバロフスク～仁川路線は毎日運航しているようだ。ハバロフスク→仁川→日本はそれぞれ 3 時間、2 時間半かかった。仁川はターミナルが 2 つあり、成田組はターミナル移動のため入国審査をしなければならなかったようだが、私は同じターミナルで乗り継ぎだったので審査は無かった。

空港のお店についてだが、ハバロフスクには商品の半分以上が酒の免税店と軽食店があるだけである。クラスノヤルスクはお土産が充実していたが、特に目を引くのは魚屋である。見たことのない 50cm の魚の干物（拓巳曰く、チョウザメではとのこと）が売っている。買ったかったが、スキーケースを預けた後だったので魚をしまえる鞆が無かった。機内に持ち込めるかも分からないし、というか臭そうなので諦めた。次行く機会があれば買いたいと思う。今回は他の小さめの魚を買った。店員にジェスチャーで聞くと（店員は英語が話せない）そのまま食べられるとのことだったが、生干しだったので内臓が鮮度を保っていた。食中毒が怖かったが無事だった。仁川は飲食店もお土産も成田並みにある。また、空港スタッフの日本語が上手なので、飛行機の手続きなども含め、困ることは何一つなかった。日本語が上手なうえに押しが強いので、店から逃げるのが大変だった、というか押しに負けてあまり欲しくない物も買ってしまった。今回はこの反省を活かしたいと思う。

宿舎はシベリア連邦大学の学生寮である。部屋はきれいでシャワー、トイレ、タオル、歯ブラシ、洗濯機、キッチンがあり、暖房もちゃんと効いていた。スリッパは無いが。水道は最初に茶色の水が出るので注意が必要だが、断水するようなことは無い。また、洗濯機の使い方がよく分からなかったので結局使わなかった。注水が遅くて警告音が鳴るし（もちろん元栓は空けてある）、なぜか洗い→脱水を繰り返した。洗い→脱水を 3 度繰り返した後で、「もう 2 時間も浪費している...このままでは無限に動き続けてしまう」と思い、電源を入れなおして無理やり終わらせようとしたが、蓋がロックされていてダメだった。しかしコースを選択し直すことは出来たので、乾燥コースを探し出すと、さすがに乾燥を何度も繰り返すことはなく、ようやく終わることが出来た。

食事は大学内にあるカフェテリアでとった。宿舎から歩いてすぐである。小皿とパンはおかわり自由だったが、メインディッシュをおかわりしようとするとは非常に嫌がられる。量が足りないということは一度も無かった。

ワックスルームが競技会場にあるため、ワックスはレース前後に行うしかない。ほとんどの国が相部屋だったが、少人数の我々がなぜか 1 部屋与えられたので、机一つを使うことが出来た。暖房が効いていて、フッ素用の換気扇があった。

クラスノヤルスクは百万都市なだけあって都会である。大体の建物の入口にセキュリティチェックがあった。これは去年のモスクワでも同じだったので、ロシア全体がそうなのかも知れない。主催者が観光を手配してくれて、色々な選択肢があったが我々は教会を選んだ。金色であった。それだけである。ガイドが英語なので意味が半分も分からなかった。大学敷地外には野良犬が多かった。人が少ない 9 時にトレーニングコースに行った時に追いかけられたことがあったが、かなり怖かった。早朝は犬に気を付けるべきである。

最後に気候について書く。夜は-10 度になることもあるらしいが、日中はほとんど 0 度前後だった。一番低くてもミドルの日の-4 度だった。ネットにある長期予報は 5 日分程度しか信用出来ない。1 週間後を見ると最高-15 度と書いてあるが、日が近付くにつれて値が修正されていた。平年のデータは実際の気温と同じ程度だったので、そちらを参考にすると良い。雪は、日向はシャーベット、日陰はカリカリである。ただ、表面だけ固まって中はサラサラなので、トラック外を滑るといきなり板が沈むこともあった。風は、朝の宿舎の近くは強いと感じたが、レース会場ではあまり感じなかった。宿舎と会場はそんなに離れていないので、時間帯の問題だったのだろうか。いずれにせよ、レース中に寒いと思うことはなかった。

## 4 日本チームを支えてくださったみなさまへ

酒井佳子

2016年4月の代表選考会から世界選手権が終わるまでの約11か月間、日本チームは実に多くの方々から支援していただきました。この場をお借りし、そのご支援の中身をご紹介します。

最初の代表選考会から世界選手権直前まで、合宿や大会を運営して下さったのが、少数精鋭運営チームの信原さん、笹田さんほかルスツの皆さまです。全ての合宿と大会が、本番のレースに向けた貴重な体験になりました。

遠征費用の捻出はいつも悩みの種ですが、今回は日本スポーツ振興センターから助成金を、北海道オリエンテーリング協会からワックス代を援助していただくことができました。おかげで選手たちがいったい何時間分のアルバイトを練習に振り替えることができたかと考えると、本当にありがたく感じます。

今回は、久々に日本チームのユニフォームが新調されました。スポンサーは、大里さん（アークコミュニケーションズ）、高島さん(かなめ測量)です。デザインも良く、選手たちは、あの転倒しやすいコースにおいても、ユニフォームを破くことなく大切に着用していました。このユニフォームは、次の代表選手に引き継がれます。

大会参加費等の海外送金手続き、助成金の申請などをして下さったのが清水さん(JOA)です。オフィシャルの仕事は、清水さんと二人三脚で行っていました。

そして、クラスノヤルスクに行くにあたって、いろいろと助言を下されたスキーO委員の皆さま、歴代の代表選手の皆さま、大会期間中、メールを通じて応援メッセージを下された方々、どれもが日本チームにとって、心強い助言、メッセージでした。

クラスノヤルスクでお世話になった方々もここでご紹介します。イベントディレクターのアレクサンダーとイベントセクレタリーのアナは、こちらが困った様子をしていると、すぐに声をかけてくれ、問題の解決に向けて協力して下さいました。日本チームの世話をして下さいったボランティアのアイシャは、丸一週間、毎日、日本チームに会いに来たほか、選手のために車を調達し、自らの運転で選手のお土産探しに付き合ってくださいました。

日本チームを支えて下さった方々に、チーム一同、改めて心からお礼を申し上げます。皆さまに、日本チームをサポートしてよかった、楽しかった、と少しでも感じていただけたなら幸いです。そして、まだまだ伸びしろのある選手たちが、今後どこまで速くなれるのか、興味を持って見守り続けていただければ、これほどありがたいことはありません。

## 5 競技結果(抜粋)

### Sprint Relay

15 teams

1 Sweden 00:35:22

Tove Alexandersson 04:29 15:39 28:13  
Erik Rost 10:23 22:19 35:22

2 Russia 00:36:15

Polina Frolova 04:43 17:23 29:21  
Andrey Lamov 11:27 24:05 36:15

3 Finland 00:37:14

Salla Koskela 05:28 17:39 29:16  
Ville Petteri Saarela 12:24 23:50 37:14

13 Japan 00:54:45

酒井佳子 09:09 27:03 45:07  
石原拓巳 18:54 37:08 54:45

### Sprint Men

3 400 m、 55 starting competitors

1	Ulrik Nordberg	SWE	13:51
2	Andrey Lamov	RUS	13:53
3	Sergey Gorlanov	RUS	14:04
4	Kirill Veselov	RUS	14:06
5	Stanimir Belomazhev	BUL	14:21
6	Erik Rost	SWE	<u>14:22</u>
48	石原拓巳	JPN	19:47
50	石原湧樹	JPN	21:44
51	岸祥太郎	JPN	23:05

## Middle Men

8 200 m、 53 starting competitors

1	Stanimir Belomazhev	BUL	33:48
2	Erik Rost	SWE	34:03
3	Lars Moholdt	NOR	34:54
4	Andrey Grigoriev	RUS	35:03
5	Andrey Lamov	RUS	35:37
6	<u>Ulrik Nordberg</u>	<u>SWE</u>	<u>35:45</u>
39	石原湧樹	JPN	54:23
40	岸祥太郎	JPN	55:31
	石原拓巳	JPN	DSQ

## Long Men

24 300 m、 47 starting competitors

1	Erik Rost	SWE	1:46:04
2	Kirill Veselov	RUS	1:47:22
3	Lars Moholdt	NOR	1:47:27
4	Andrey Lamov	RUS	1:47:28
5	Andrey Grigoriev	RUS	1:47:34
6	<u>Martin Hammarberg</u>	<u>SWE</u>	<u>1:51:05</u>
31	石原湧樹	JPN	3:00:03
	石原拓巳	JPN	DSQ
	岸祥太郎	JPN	DSQ

## Relay Men

6 Controls, 6.700 m 14 teams

1 Russia 1:29:13

Andrey Grigoriev

Kirill Veselov

Andrey Lamov

2 Sweden 1:30:25

Martin Hammarberg

Ulric Nordberg

Erik Rost

3 Finland 1:32:21

Tero Linnainmaa

Jyri Uusitalo

Ville Petteri Saarela

4 Norway 1:33:17

Bjornar Kvale

Oeyvind Watterdal

Lars Moholdt

5 Czech Republic 1:36:49

Radek Laciga

Petr Horvat

Jakub Skoda

6 Estonia 1:44:39

Margus Hallik

Even Toomas

Mattis Jaama

13 Japan 2:18:47

石原拓巳

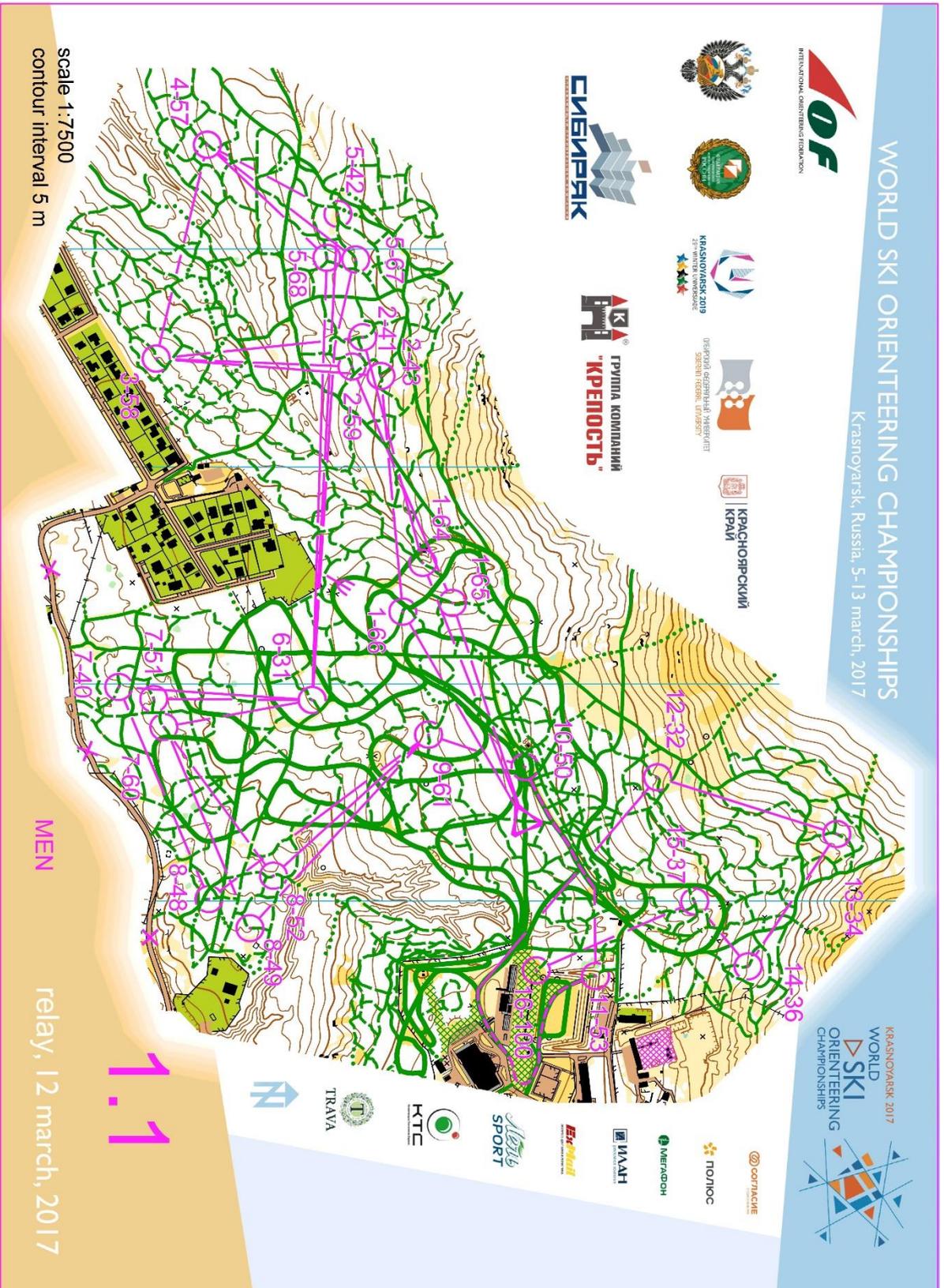
石原湧樹

岸祥太郎

# 6 地図・大会風景 ロング











会場となったバイアスロンアカデミー



ワックスルーム



女子の競技が行われているときの男子選手の隔離場所



スプリントゴール前の岸選手



スプリントリレーのチェンジオーバー



ミドルゴール前の石原湧樹選手（左）

2017年 スキーオリエンテーリング世界選手権報告書  
発行日 2017年6月  
編集者 石原拓巳  
発行責任者 酒井佳子